

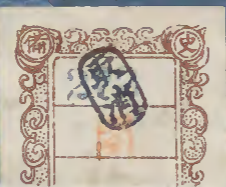
武林名譽錄

四

新談話

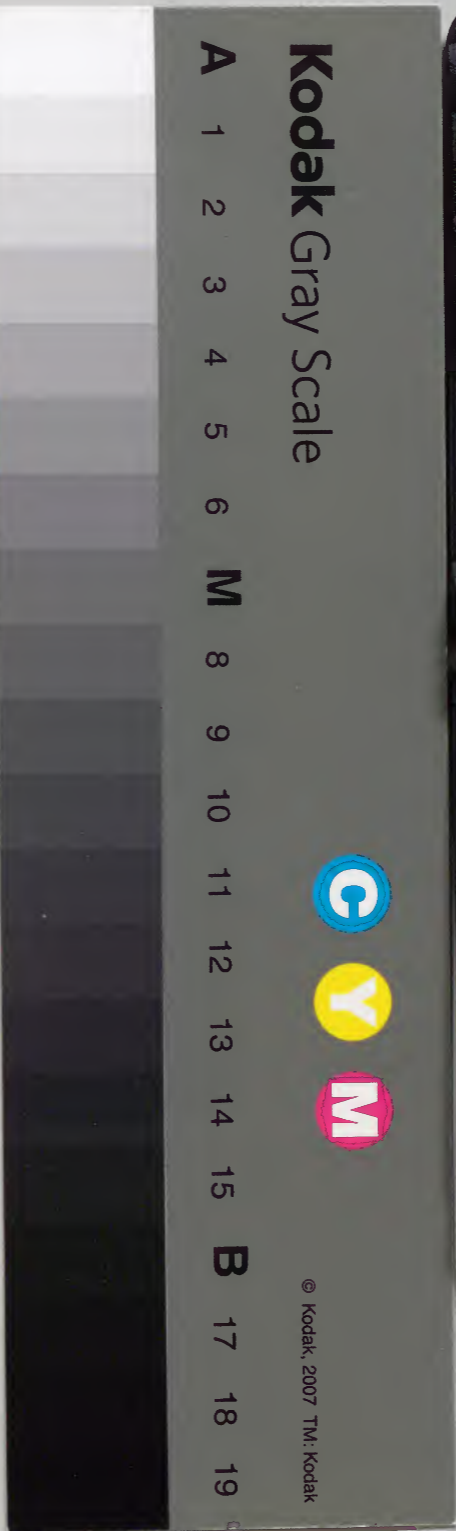
內閣文庫	和書
函架	冊類
170	5
5	36

第一 共五

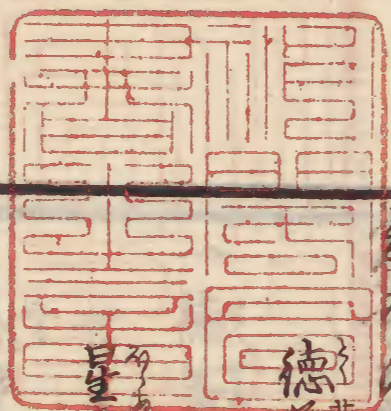


內閣文庫
番號和 34470
冊數 5 ( 4 )
函號 170 36

新刊本







武林各書録卷之三上目録

德善院法印父子不快乃事

前田家系統乃説

皇合又十郎教房後室勇烈の事

飯尾隱岐守信宗子供乃傳

信長と生害乃異説

福島左衛門丈丈正則乃酒船八丈島へ漂着の事

甚目寺乃尼の事

北條左衛門大丈乃事

波岡左衛門佐顯忠甲列へ使臣激事の事

波岡乃北畠家事の事







い不及及ありく中あり中遠しく至君の以身へも入  
とせりそくた徳善院年分別ふひと以意何も以知と  
感一被中ひ事利家公夜誅

今按不徳善院と云ハ前因玄以法印なり羽柴元  
との玄以乃長子元近將監秀以か里玄以法印ハ前  
田二郎左衛門忠重乃長男ふく尾張國愛智郡乃  
人か里忠重ハ天満官第二御子文章博士厚茂朝臣  
乃孫太宰大貳輔正乃長子右中弁為紀乃男忠貞祖  
父子從く鎮西くあり一頃原田某の婿とか里く志  
かは原田忠貞とよ称せ里忠貞後子文章博士とか  
里能登信濃等乃守よ里刑部兵部乃少輔とか里少

尾張ノ一

内記不終ふ其長子安明乃流案子下向く原田乃武  
部丞と云二男仲章ハ尾張外下向く愛智郡前田子  
往く尾張掾ふか里くハ前田尾張掾と称是是ハ  
國司と共く國の事与りハ尾張掾ハ現任ふ志く公  
解配分乃列たり院宮以下御給乃掾ハ揚名乃司の  
くふく任限ゆかく公解ゆかけ是ハ生名をハけ  
く呼ぶ形なり尾張國圖を之述ハ前田村是代國乃前  
田氏乃祖か里仲章十七代前田又ハ郎忠治乃里男  
即忠重形なり或ハ六波羅乃奉り入齋者伊豫房玄基  
乃孫前田源也郎利也ハ後ふく藤原氏と云云  
ふや爰ハ教孫と云ハ加賀大納言利家郷乃と形り



肥前守とハ中納言利長卿を云永禄元年戊午歳生  
る利家卿廿一歳乃時形其頃利家卿前田孫口系  
とく信長乃勘氣許せと始ふや天正四年正月安  
土乃城普徳系創あつて二月信長安土了後らせしむ  
へハ信忠岐阜不怪しむハ是時玄以法印ハ岐阜不  
あるとく信忠了仕人利家卿ハ越前府中城立あくと  
万二千石乃地を領しむハ利長卿ハ前田孫口郎利  
勝とく十九歳あふへ一同十年能登國を切取く府  
中不并を領せら致物あふ六月利勝史婦都見物の  
為上京あふへとく二信長晩方勢田より至ら  
色く時信長云乃下僕顔慕と云者馳参り本能寺の

民四ノ二

變を告利勝乃從者肝をけし色を失入敵定めく安  
土へ向入つて及乃生あつて中あつてハ爰より三十  
又里不遠し尾張乃一族一色乃前回與十郎乃許へ  
ハ廿又里餘ふとく熟せり利勝乃内室ハ信長云  
乃姫若形一色へ退せむへとく自常劍し馬  
子騎恒川監物奥村治古傳門を名具し尾張へ越む  
へハ利勝ハ安土了故に各補ふへ物よく立徳め  
府中へ赴くと續武家閑談子見えり是後並ハ利  
勝安土不臣しと七年の間と聞也天正十一年賤糸  
乃軍敗也築田勝家自殺せし後利家卿父子秀吉云  
子後ハいは加賀國石川江沼二郡を加え領し御



山城守たるは 御山の今乃 同十二年秀吉公推大納言  
言不任しあふ子よと羽柴筑前守と云名を利家卿  
子讓り利勝をハ羽柴肥前守利長と改らる是羽柴  
と云氏を人子與らる一始とハ中依利家卿よく父  
子乃親を全くせらるる一と午吉子卓絶と云ハ一  
堀越乃御所改知卿御子茶々丸御曹子を疎々終子  
父子乃長子是を問う其極や所曹子父逆を犯さ  
子及ハ身死一國亡ハ幽魂長く血食せハ武田信虎  
朝長晴信朝長と相和せハ志く父他卿子流浪一子  
子篡逆乃名を被らるむ晴信朝長子息義信を懐と  
せハ終子父慈教を失ハ子孝順る及ハ尼子經久乃

武田一三

子息宮内少輔興久を殺さる一由其始父教を失ハ  
よふ是等乃人風く利家卿心あり付必是子至ら  
以父子身命者よくあつて鑑ハ大益あふハ一  
又云利長卿乃内室父乃難を聞かろ尾張退一  
其何乃心持や父乃讐三里の近きふあり是を棄  
廿餘里の遠き不走る身を遁る一とを計り復讐  
を計り玉を以惜か内室不戴天乃魂を復さる意  
あつては築田晴家越前守ありて舅利家卿と親一兄  
信雄伊勢守ありて路近し強家子是を議る及ハ  
そ以身刃剣を帶よく騎馬と云共言ふ是ハ  
一星合又十郎教房 星合 乃室ハ飯尾隱岐守信宗の女



皇都見物乃為信長公乃所後子付くよ是けふ日  
岡みく人行定ありと後事からいと見く栗田山  
子よ皇京の方を見遣せば黒相文子後々鯨波川と  
其入敵夥たしく聞ふは都子軍ありと覺ゆは  
武士乃妻子としく聞怖子遁走んも本意ありは  
謀叛あく本能寺を攻ふは聲を聞きたるや  
大軍ふあ我あ女あまといふ一家乃親族と云當時の  
皇君形皇御先途を見放ち中へいふ非急けや若黨  
共とに女入連一若共を勇めは約とゆふく走るとゆ  
ぬく本能寺乃東乃築地ふ駈付く見逃は火を本堂

四ノ目

お掛り書院乃棟了後皇猛火烈くたは依何處う門あ  
ると見廻さく守手乃南西北とて圍を築くは  
あかり故了守り乃皇去は北乃門より皇向と志  
六角表へ向ふ處へ誰といふは白綾う包く物を  
持く屏を越ゆ乃あり是ハ軍の給ふ物盗々逃るは  
包く悪く首切く捨るやと思ひ持たふ長刀取直く水  
溜らひ薙伏く中包く物を解くは出は何  
右大臣教乃御着あり内室せきく涙をく免まひ  
元乃如く包く若黨子渡り紫野の文徳寺へ持参せ  
る中を御を自は六角表の門より寺中へ走入今日乃  
軍の大将ハ何處より入りて中へ入りての以と将



早く馳めりしと光秀もろろと云者おろろと云方  
 形く西洞院を北へ紫野へと急ぐふと武共一人走  
 来り大將の台せあつたけ方へと云内室急意心と思  
 然不意からん處へ行くも光秀めを討せめいせ  
 来ると云妙へ向ふ何れせん去りけ奴も南の敵を  
 生く返さん小好らいと長刀を取直さふと志く首  
 中子打落し静々と大徳寺へ三退寺中へ御首を守護  
 志く星合城へ義黨を下りて事の仕を告たすく星  
 合大に驚き取あへ以上落せんと志きりけ内小  
 羽柴筑前守攻上り六月十二日光秀暴死し志か  
 筑前守けを傳聞御葬の事よりの沙汰しと星合の

武田ノ

内室を奪く賞されり色ハ星合面かく中思ひたり終  
 子遠くか里く又對面せいと形く内室を紫野の傍に  
 住く慶長七年十一月廿日逝去鳳潭院慶山宗伝大孫  
 定危と教り大徳寺乃大徳院を葬送り又急院舊記  
 今按る飯尾隠岐守信宗ハ織田彈正忠信秀の後身  
 形く秀吉公乃時ハ幡山侍従と教り御相傳伝たり  
 其長子茂助教成之信忠卿に仕りて本能寺に討死  
 せ里其妹も秀吉公乃室家とあり其次ハ長谷川菟  
 五郎り妻其次ハ星合伊左衛門具敏乃妻と系圖ハ  
 見ゆ別子又十郎教房乃妻と云形く星合系圖ハ教  
 房ハ北畠星合兼儀具種卿の長子なり永禄元年廿





武田 信玄









慮外中せし御免ひし酒乃王ハ承をり女とく一  
樽ふ持合せし干魚とく彼男乃任所へ贈り其後風  
静まり江戸へ着岸し酒を臺所役人へ渡し直し同付  
乃方へ紗籠風を遇し八丈へ漂着せし始末秀家の酒  
の意んより多く乃樽より少し、抜ぬの樽数も遠く  
あり乃色と巾人よりあやま後浮田殿乃所成形り  
去後園き王ハ如何と存し自中より一樽進上せし由を  
有乃まゝり訴へたり同付巾其分激切にけ進右の  
越え云上り及ふ正則向く其老呼おせと云其老ハ勿  
論役人共巾定めり手討せらぬと申らんと思居し  
し正則爰へあよと側近く呼寄天晴汝ハ出来たり一

巻四ノ八

船乃酒樽を皆失ふと申我身も於て苦痛非以  
さ色共我指圖受へる便宜なきと樽持しと女  
能計ひし我老我老を憚り申へは正則ハ否  
番かふ故了家来まゝ情志し人ト彼男も下茶色ん王  
何程々無念かかへり文多く乃樽より抜ぬハ我更ふ  
知より有へり以難知し遇し樽と糸棄りりと云共激  
へきを有乃おろし告報しハ汝ハ律義正直かふ知え  
非妙々と云く撒嫌いハ王申能有しと抄 茶話記  
今按ふ尾張國名所國會ハ海東部二寺村ハ福島  
議正則御宅趾あり正則幼名ハ市松南村乃大ニ與  
左衛門ハ長男ふし幼少乃時人を殺し甚同寺ハ



隱居ありし新居家村乃赤林氏を教ふる小田原  
へ落し北條左衛門守正乃許し有る秀吉公  
縁あふを以て彼公勅興乃て免官歸ふ人史記に  
又鹽尻ふ福島正則清洲より國替の時生駒澤井等  
南國乃先方乃士了別を告旦曰我微賤少年の時二  
匹乃湯の餉を運ひしを際甚目寺乃釋迦堂に老尼  
り所お休らひし老尼厚く待し食を與へ茶を  
飲しむ我今是を忘る以食糧を施し其恩を謝し  
我他列に移らぬ老尼便ぬかぬ人如ん卿等宜安  
老尼を眷顧ハ我由是あんとあふ諸士由諾せり  
是より毎年彼院へ米を給ふると浮井楓軒老人史

武田ノ九

子後を侍りし正則ありけり武老ありし身乃  
昔を忘る人乃恩を報し微賤乃時を恥を去り諸  
家子語を驕るを責めしし事實に奇特と云へし  
と見ゆ塩尻乃仍去天野信景寛文元年生れ正則  
乃没せし寛永元年を距る二十八年前也但清洲を  
去し慶長六年十一月朔日信景の生れし年と六  
十二年を隔り強之の澤井楓軒と云ゆ正則は老尼  
を誅せし人子有へり人強之共程遠からぬ  
人乃言かば及微とあまゆる正則は大山乃子から  
むる武氏譜に定り形かへり以其生永禄元年辛酉  
上巳天正十一年四月賤岳乃軍中より廿三年形り



北條左衛門大夫と云ふ綱成氏繁氏勝乃三代形也  
 終去く云則以仕之其綱成也里綱成天正十六年  
 七十三歳あり卒以云則子長生終之口十六歳あり  
 綱成乃父ハ遠列土予城主福島上総介正成と云武  
 田信虎と飯田河原ヲ我々討死以綱成いさく辯子  
 代とく七歳ありしを北條氏綱構と育く我女了配  
 世北條左衛門大夫と云上総介と云祿せしけり川  
 越夜軍又百餘騎を以て兩上放乃八万六千餘騎  
 を破りしを綱成廿二歳乃時と聞ゆ十八歳乃時と  
 黄生納乃小旗乃八幡大菩薩と書た也ハ直八幡共  
 黄八幡と云呼せしとけり市松氏等乃之を思ふく

武田ノ十

福島と名乗又左衛門大夫と云祿去く綱成乃武勇  
 を敬羨とすと其形系極一巖島小平相國清盛寄附乃  
 法華經あり裝飾乃美麗をふて心由調由及も是以  
 正則藝列子守大夫初代經口百餘年乃星霜を經く  
 や、破損了及ふを惨黒漆蔀繪乃辛横を寄附せら  
 る慶長寅年十月六日從口位下行尤近衛推必將  
 豊長朝長正則と題せら也たす。情例より移りて僅  
 然也ハ追遠乃情由厚かりし出と知へし又公限帳  
 一冊世了傳も也里尾園不見二万二千福島丹波正  
 澄一万余木造火腰一忠一万九千長尾隼人一膝六千  
 石大崎玄蕃長行八千百尾園右衛門右郎又千五百福  
 余



島伊豫守正守又千牧主馬七子真綱又郎右衛門貞  
 成百石村上夫右衛門通清百石津田百石因幡百石  
 津田百石豊前百石小川百石若狭百石坂井百石信濃百石  
 等八大身形二子不以上十七人千石以上以上十二  
 人百石以上以上十六人百石以上以上二百以上十一人  
 二百石以上以上七十一人總馬乘六百三十人と云  
 扶持方の一歳二石と定めらる一日以上合六扶持米  
 二万八子六百廿石を給とあ也の正則の士を養  
 小と又盛なりと云へ了  
 一北畠推大納言具永郷乃弟不波岡左衛門佐顯忠と云  
 人あり武田乃弓箭を也かかりく遙と甲列へと

武四ノ上

心さ一武藏國府中乃宿不至る頂皮籠餘多馬了負せ  
 武士十三日人遇た里跡子あり先了五日野乃涉中  
 越く野を終りとふ主と覺し武士波岡子立向へ成  
 邊子見則中さく致了也何地より何地へと乃御旅か  
 らんと云顯忠是の奥列外濱より甲列へ通る形と  
 答ふ彼武士甲列ふ何人を尋ふ人と同波岡蓋澤乃  
 何某と答ふ彼武士其ハ山梨郡栗原乃蓋澤と同然  
 乃里と云時了己ハ其蓋澤乃由緒乃者分る下終了  
 乃沙汰さへきとありく行向へ今歸るふ以遠々乃客人  
 乃おをきん了差付く手感も也あらん是らん爰の  
 若人の是を布からん中疾先三角と中世也急い



と云聲の下よ望若き武士のと駈抜く承せりぬと  
云うちり風乃吹如く直走ふ走く影も見えぬ  
波岡を彼武士と并連其夜ハ高尾山乃下宿更曉也  
ハ出立く猿橋より入交り重連ハ日まき暮るぬ  
いゝさらば今宵も爰ふと下三翌日ハ栗原了杉若へ  
きふ湊若ハ誰彼と定めおと一々夜半せつり不皆臥  
ハ夜やうく曙おんとせ敷お馬又六足下部十六七  
人猿橋了馳若く外濱乃客人乃宿ふ入東御迎の由を  
中以波岡餘りふ思掛ぬとおまの波路つと形を  
武士了角いおんと其人乃宿せり方ふ入く見るふ十  
二三人有る者せり一人の形よふ不思議のてく

思へハ宿乃まふ夜ハ諸共了宿里一客ハ何等其終末  
知せやと問く主実ふ心得以氣子了答ハ敷換昨夜爰  
子宿らせおハ及敷計子出我あせ更ハ他人の宿らせ  
おハこの無里一由乃をと云然種を不尋せと由總く  
おくと云ハ為方好く了迎乃下部ハ何と云く我等り  
爰ふ有とハ知く来也る我と問ハ尤ハ一昨日乃夜半  
計子栗原乃蘆澤某り許ハ飛脚走著く奥列よ更珍爰  
客人来りおハ形り急ぎ迎を参らせら也ハ一是也  
國乃福をふへき形更と云ふよと誰ハか渡らせおハ  
と問ハ北畠教と云時ハ府中乃走使来りく同く蘆  
澤ハ迎乃人馬参らせよと云よよ更斯出立くハ形り



天文八年  
窪田統泰乃

圖  
用  
人



信也國畫



卷之七



と云怪との思へとも蘆澤より下部へ違ふと申けは  
其の休かをもとて菴子乃嶺に越ひて蘆澤に若黨共  
六七人出會ふ旅の疲れかくは先とてめきひて先  
膳所乃館へ入たり波岡より移落居たり彼怪しき  
男の事わづらふ掛りてわづらひぬるやあらんと思  
ひともけ病乃易とてからと志子やなと覺ゆ家  
から子勿々打解ゆ世に暫時ありて蘆澤東里遠境を  
よくも思ふ玉へとてと密に述さく何しん斯  
むと同波岡武田乃家の軍法坂東より並ひおきては打  
おく府中より館に参向しり割を承むと云へ蘆  
澤より某回國しり外濱を至りて頃末乃情よりとく

心静子修好しりていへ其思ふ報せん料り涯合走也  
魚より子い祖今乃館に甲斐乃國を以て城と一門  
譜代乃歴々を同方より置て石垣と為さく先代  
ふの郡内乃小山田の都留郡乃守護あり駿河相模  
藏乃押領使たり膳所殿の山梨のに一乃國たり  
奥より栗原乃館不和乃館と二のあり何し一姓の源  
氏あり他國より出せは武田と名乗ると中興あり  
左名を中か里御邊にけりよ入るへに翌日の膳所  
と聞しり栗原乃館へ向せ玉入る栗原乃一日還  
留ありり又石和の館へ入せ玉入る府中の御館  
へ参りせ玉入るへけり信濃上野のに々皆か



くひへと中語入内より日暮せしぬ宿のさゆさゆ  
ふち初ゆ及ぬ結稱せらむたり川とぞく勝派乃  
入道より蓋海を相具し宿を立出但郎等三人  
馬副雑色中間六人なりし。残ハ勝派を止め  
進物乃長棒ハ棟致とく續送る如く粟京子著ハ館  
へハ入せとあお禅院を轉し湯ひる世髪洗え  
せぬとく種くゆりせと勝派子起たり翌日ハ不  
知子到る火ハ火栗京乃如く爰ハ岡田堅挑致ハ来  
御館より乃口状あり路を乾き砂し二間より足輕を  
配り又間より長柄十間より鉄炮一町ハ物頭を出し御館  
より引續きたり依御館より廣間を見せハ猿橋

みく見失ハ川系武士ハ中間ハ郎等ハ上下著く勝派  
突立し見奉りなく我笑し居る波岡ハ思ハハ  
換儀ハ常衣着侍を色々お世國境より外を巡  
らし。蒲團ハハハ乃を及間道より頼ハ未知を承り  
乃と悟り志ハ何と云く取く密教了居大  
里を有く晴信朝長出會也抄ハ續發せらむ一月餘  
逗留せしかと由是外濱ハ土産りと忍入を止ぬ  
歸里けあす我家ハ妻子ハ甲利あり有く之を妻梓  
子知く待ひけく角ありし如何ハ鬼ありし時ハ何  
と覺く我と同波岡ハありしか。そハ知川やと云  
妻やハ絶以御使乃ハハハハ乃を云波岡子ハ拍



諸の又晴信朝長の方便せらるるなり人乃國伺か  
せんそく我國伺かを遣ししを知らせあか猿智やと云  
て二三日の言そく史息終る居しとかや波岡記事  
今按了北畠權大納言具永卿と中の鎮守府將軍顯  
家卿七代乃孫あく陸奥國東日流六郡ふ主と一行  
岡を遣ししは行岡乃御所と中せし具永卿の  
父の式部卿具運と云具運乃父を左近中將後具と  
云後具乃父を推大納言忠具と云忠具ハ顯家卿の  
長男顯成卿乃孫あく父を行岡御所親成と云行岡  
乃盛あつりし頃ハ二百八十人乃國侍を遣しし七子  
餘騎乃勢あつりしと云津輕一統南部大浦今津輕乃

武四ノ十六

諸大將中皆去乃御所乃旗下あつりし歴名士代了  
源具永 奥列波岡 天文九廿日從父位上同日彈正  
大弼 本朝家と見え同廿一二廿八左中將從位下  
ふ叙せしは見也浪岡村午頭天皇乃棟札ハ永祿  
二己年北畠大納言源具永卿再興かと見えたは藤  
原乃入道と云ハ武田陸奥守信繩乃二男あく次郎  
入郎信友後子安藤書と叙せしは天文廿年入道  
あく永祿三年十一月三日ふ没在栗原乃館左衛  
門佐昌晴左兵衛尉論冬二代乃際あか龜昌晴天  
文廿一年三月八日信約時田了戦く深子負に月廿  
三日ふ卒以然らハ病中あか故了波岡を館の内



へ入らふかふやあるへき御らハ此事天文廿一年ニ  
月中旬より且月中旬との事之間四晴信朝長藤原  
乃後廿二歳乃時と云く也夫也

一信長乃士市橋下總守ハ放狂乃由乃形乃若狹乃武  
田乃家より信長へ使共安里東常運しく云く廣間了  
和居夫より下總乃共々しく如何致出川叶く知教上  
見と由かき奴とく使共乃家へ出く行を臥豆を使共  
子向子を以く陰囊を和き以使共是致乃解ハ如何致  
くやらのやと云くと致後信長聞ふハ云く笑せら也  
たりと也 老人雜話

今按ふ武田ハ甲斐若狹安藝の三流あり若狹の武

武田ノ十七

田乃甲斐若狹安藝之國乃守護職あり九列探題  
兼たより陸奥吉信武朝長の子ハ伊豆守氏信初  
信武朝長子代々安藝の守護職と云ふ氏信早世の  
後弟の輝正少弼直信國務を執りしより云ふ子ハ  
世ハ兄乃子信生を養ふ子と以信生庶園院將軍ハ  
見奉りてけある御字を賜く陸奥吉満信と云又早  
世せしよ且満信乃弟信守を養ふ子と以伊豆  
守と云是ハ早世し其弟信繁を養ふ子と  
以大膳丈史と云信繁乃子ハ大膳丈史信賢と相傳  
出く安藝乃守護た且信賢子男子二人あり安藝若  
元綱丈原丈史國信と云元綱ハ安藝守護職を終く



早世せし子より嫡子元敏継父より子としく安藝の  
國法東乃銀山子住し國務を押し領し國信若狭乃守  
護を賜ふとく入部し是若狭武田乃祖なり國信乃  
子治部少輔信親早世せしより其弟大膳大進元  
信を以て嗣とし元信乃子は大膳大進元光と云夫  
文廿年逝去お進ハ信長十八歳あり清洲乃織田彦  
又郎を被らせし年あり若狭より使老あふへし以  
元光乃子伊豆守信豊ハ永正二年誕生お進ハ信長  
八歳ありと廿九歳あり弘治二年薨御あり毛利元  
就の爲り害せられ信長廿三歳の時なり信豊の子  
大膳大進義統ハ大永六年の生れあり信長八歳

歳四十八

乃長たる且靈陽院將軍義昭卿乃婿婿お進ハ永祿  
八年光源院將軍義輝ハ御事ありし時ハ南都  
より細川義孝よりお進を御供ありしと若狭中々  
渡河なりし時ハ若狭より朝倉織田ハ御使を立ら  
せたりし時ハ岡持お進ハ永祿十一年乃とありし御  
使ハ上野中務大輔清信細川兵部大輔藤孝等あり  
へし此時信長美濃を切腹ハ稲葉山ありし時なり  
信長廿六歳義昭卿廿三歳老人雜話書ハ江村雪村  
江歳なりし然も信長初より義昭卿を敬む意あり  
く惟も進を名とあり江村を破り上洛を急せし  
爲り意と知る蓋其の項羽乃懷王を我家の三子と





と云く敬世は終身是を害せりと信長乃義昭卿を  
 將軍と仰ぎふりて是を敬世は將軍を怒りて終身  
 天正元年三月信長大軍を帥ひ御所を圍ふ是を攻  
 むと以然共君臣の義を恃連兵を引く去者の將  
 軍何を為す人愈々と侮る家か故形り將軍を  
 憤懣に堪させ玉ふ以榎島了権籠らせ玉ふと計畧  
 乃短き如くあつしゆせと信長乃禮あきを怒らせ  
 玉ふの極と云へし信長此市橋を不敬を強張の罰  
 せし界を以て其胸中乃不長を察し專齋の進を何  
 と云ふぞ歎む何ぞや

武林名譽録卷之三上終

